

続く古墳時代中期から再び集落が本格的に営まれるようになる。ここで注目されるのはカマド導入期及びその後の様相が見て取れる点である。カマド導入時期等については後に触ることとするが、少なくともカマド導入後の5世紀中頃以降継続的に土地利用が行われるようになり、6世紀前半にはピークを迎えることとなる。この時期には集落域は調査区東側へも広がるようになり、より広範な土地利用が行われたことを示している。なかでも注目されるのは1・4号溝と北東側落ち込み部の存在である。第4章の分析から、北東側落ち込み部堆積層は水田であった可能性が指摘されている。この落ち込み部が何時形成されたのかは不明であるが、少なくとも6世紀前半から湿地状の窪み部を利用した水田として使われていたものと推測されよう。この水田からの水を求来里川へと流す水量調整の役割を担っていたのが、集落を分断して流れる1・4号溝である。埋没土層の観察から一定量の水量が予測される。第5章の水利調査の結果では、この周辺は湧水点からの灌漑地域で、現況でも求来里川へと向かう水路などが確認されており、1・4号溝はその起源となる可能性も考えられよう。いずれにしても、6世紀前半段階に水田利用が開始されるとともにその灌漑施設などが整備されたことにより、集落規模が拡大したものと思われる。また1・4号溝には集落を区分する意味もあった可能性がある。6世紀前半に溝の東側に若干居住域が広がる以外は住居の殆どが溝の西側にのみ見られ、東側には土坑などが集中することから、溝の東西で土地利用方法が異なっていた可能性が指摘出来る。

その後6世紀後半にかけて住居は構築されなくなり、徐々に集落利用が縮小していくが、古代・中世の遺構も少量ながら認められ、水田利用は継続していた可能性が高い。ここで注目されるのは調査区を東西に流れる5号溝の存在で、これまでの南北方向とは異なり落ち込み部に平行して作られる点である。この溝は浅く、水量も豊富ではなかったことから水田区画溝として構築された可能性が考えられる。すなわち、自然地形を利用しながら行ってきた水田灌漑整備が本格化した可能性が指摘出来るのである。

さて、上述のとおり本調査区における集落利用が極端に減少していくなかで、6世紀後半～7世紀前半にかけては本遺跡にかわって求来里平島遺跡^{註13}や名里遺跡など求来里川の上流域に集落が形成される。続く7世紀後半～8世紀には再び本遺跡周辺の町ノ坪遺跡A・C区^{註14}や金田遺跡^{註15}などで集落の存在が確認されており、本遺跡の空白期を埋めるように求来里川流域において、集落が特定地域を移り住んでいくものと思われる。これは古墳時代中期以前においても弥生中期～後期では小西遺跡^{註16}・金田遺跡、古墳前・中期では金田遺跡などの遺跡で集落の存在が認められており、同様の傾向が継続していたものと思われる。その後、中世期には流域全体に遺構が認められ、流域の開発が広域に及んだものと考えられよう。このような特徴を示す求来里川一帯での土地利用状況を詳細に検討するうえで、本調査で明らかとなった古墳から古代の水田の開発状況や土地利用状況は、有用な成果を示していると考えられる。

(2) 日田地域におけるカマド導入とカマド・住居構造の変遷過程

1. カマドの導入について

本遺跡の特徴とも言える初期カマドの導入過程についてここでは触れる事とする。この導入期の良好な資料を提供しているのが23号住居と19・24号住居の土師器の良好なセット関係である。カマドが導入される19・24号住居の資料から、少なくとも重藤編年の4期にはカマドが屋内施設として採用されていたと言える。なかでも24号住居出土の須恵器から、少なくともTK208段階に絞り込む事は可能であろう。従って本遺跡例ではTK208期ないしそれ以前のTK73～216前後、すなわち重藤編年4期以後に導入されると言えよう。では、日田地域全体においての状況を確認するために、市内の初期カマド導入前後の事例を検討してみよう。市内における3B期の地床炉の事例は幾つかあり、近郊では金田遺跡1次5・10・15号住居、3次214号住居などが挙げられ、小型丸底壺を有する良好な3期のセット関係が見られる。そのほか手崎遺跡^{註17}1号住居、陣ヶ原辻原遺跡^{註18}4号住居、

石ヶ迫遺跡¹⁹7号住居、口が原遺跡²⁰4号住居、一丁田遺跡²¹6号住居などが挙げられ、なかでも陣ヶ原辻原遺跡・手崎遺跡例などは良好な3期の土師器のセット関係を示す地床炉の住居である。次にカマドが導入されている住居跡の内、4期ないしそれより若干古い3B期の可能性のあるものとして、金田遺跡1次8・16号住居、3次212号住居が挙げられ、甕・高坏のセット関係から4期の特徴を有している。ただ、これらのセットの中に小型丸底甕が見られ小型甕が出現しない点や初期の蜂の巣状の蒸気孔を有する平底甕が見られることなどから、3B期に上る可能性がある市内でも最古のカマド導入例と言えよう。そのほか、確実に4期に該当するものとして、大肥遺跡3・4号住居、求来里平島遺跡1号住居、金田遺跡1次9・17・18・20号住居などに類例が見られる。この時期には小型丸底甕は見れず、中型直口甕のみとなるとともに小型甕が出現しており、またカマド導入の事例数もかなり増加する。以上のように見てくると、確実にカマドが導入されている住居の大半は4期以降ということになり、一部3B期の須恵器出現以前に遡る可能性のあるものが見られるということになる。これは、初期カマドの導入例の豊富な筑後川中流域においても、3期に遡る可能性のある塚堂遺跡²²7号住居古段階等の多数の住居にカマドが導入されている状況とほぼ一緒で、この地域のカマド導入時期に言及した重藤氏²³も、確実にカマドが導入されるのは4期以降であるが、カマド・甕の出現、朝倉古窯跡群における須恵器生産と製品の流通など新たな生活様式の変化の兆しが3B期に起こっていた可能性を指摘している。従って、地理的に影響を大きく受けている可能性の高い日田地域も、この動向にほぼ連動していたものと推測されるのである。

また24号住居の朝倉窯産須恵器の存在は、日田地域まで製品が流通していたことを示しており、近接する金田遺跡²⁴では陶邑産と考えられる初期須恵器が出土している。この須恵器の出現過程については今後の資料増加を待つて検討する必要があろうが、金田遺跡の3B期に遡る可能性のあるカマド付き住居には朝鮮系軟質土器などが伴い須恵器は見られないことから、現時点では須恵器の流入は4期以降と考えておきたい。また、これらとは別に朝鮮半島からの文化を示す資料のひとつである鍛治関係では、3期の荻鶴遺跡²⁵で鍛治遺構、一丁田遺跡で鉄鋌が出土しており、カマド・甕、須恵器等の導入よりやや早いものと思われる。古墳時代中期は朝鮮半島の文物が流入し、生産技術や生活様式など社会に大きな変化がもたらされた時期である。カマド・甕や須恵器、鉄生産技術などの各文物の日田市内における受容に時期的なズレが生じていることから、朝鮮半島からの文化・文物は一遍に流入するものではなく、漸移的に3B～4期にかけて受容していったのではないかと捉えておきたい。少なくとも本遺跡の調査例はこの文化受容状況を解明する上での一助となる貴重な成果を示しているといえる。

2. カマド・住居構造の変遷過程

本遺跡においては5世紀から6世紀後半までの資料が揃っており、カマド導入から竪穴住居の衰退までの間、作り付けカマドが住居構造にどのような影響を与えたのかを検討する良好な資料を提供している。しかし、この間の日田地域におけるカマドの特徴及び住居構造の変遷についてはこれまで検討されてきていない。そこで、本遺跡を中心として、市内各地のカマド導入期の5世紀～竪穴住居衰退期の8世紀までの竪穴住居及びカマド資料を検討し、カマド導入から発展までの過程を検討してみたいと思う。

日田地域におけるカマド・住居の構造的な特徴を検討するうえでは、隣接する福岡県域の状況をまとめた小田氏²⁶の研究や、筑後川中流域のうきは市堂畑遺跡の古墳～古代までの状況をまとめた大庭氏²⁷の研究などが参考となる。氏らの研究では、「概ね6世紀後半から住居壁から突出するタイプのカマドが出現し、8世紀にかけて盛行すると共に煙道が長大化する。この流れに連動しながら竪穴部が縮小化し、床面中央にあった主柱穴が住居壁側に寄り、最終的に竪穴外・無柱穴化へと向かう」との傾向が示されている。このカマド構造が住居構造と連動すると共に同様な構造変化を示す点は、笹森氏²⁸も指摘しており、全国的な動向と連動したものであると言えよう。しかし、この中では導入期前後の住居構造の変化動向には触れられておらず、またカマド設置方位やカマド規模などには触れられていない。そこで、先学の指摘事項を踏まえつつ日田地域の動向について、住居構造と

カマド構造に区分けして分析と検討を行う。

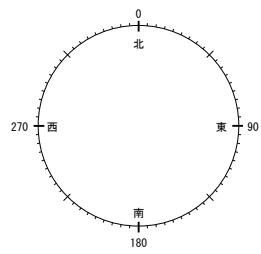
対象とした住居は市内で確認される5世紀前半の地床炉の住居及びカマドを有する5世紀～8世紀の竪穴住居が出土した30遺跡162軒分の資料で、138項に挙げる報告書を参考とした。時期比定については、基本的に報告者の記述に従ったが、註1に挙げる文献を基に詳細時期比定を行った関係上、一部報告書の記述から変更したものもある。時間軸の設定には第4表でまとめたものを使用し、重藤編年3B期を5C前（カマド導入前のものに限定し、導入後の3Bの可能性のあるものは5C後に含めた）、陶邑編年TK73～TK47までを5C後、MT15・TK10を6C前、MT85・TK43を6C後（分析によっては1・2として2期区分する）、TK209以降を7C、大宰府編年II期からを8Cと任意に区分した。なお、紙面の都合上対象住居のリストを割愛した点はご許諾いただきたい。

カマドの設置方位について

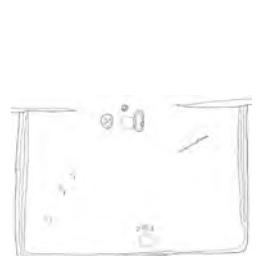
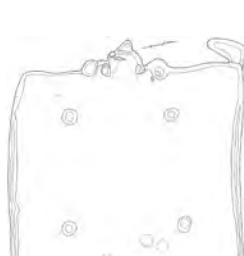
カマドの設置方位については北・西カマドや東カマドが一般的に多いと言われ、その設置規則によって地域性や集団間関係を指摘されることもある。しかし、そもそも方位の設定が明確ではなく、概ね北や西といった方位設定が使用される場合が多く、北西・北東などの曖昧なものの処理に苦慮するケースが見られる。そこで、第78図の方位角を使用して0度北・90度東・180度南・270度西と設定し、方位角にどのような傾向があるのか検討してみた。なお、カマドの設置方位角の計測には設置された壁に対する主軸角を利用し（隅カマドを除く）、

5C前のものに関しては屋内土坑の対面壁に対する角度を主軸壁方向と仮定した。これは第79図に示すように、うきは市塚堂遺跡D地区第17号住居や市内の大肥遺跡C区3号住居の類例が示すように、従来の弥生的な屋内土坑の対面にカマドが設置された可能性が高いことからである。

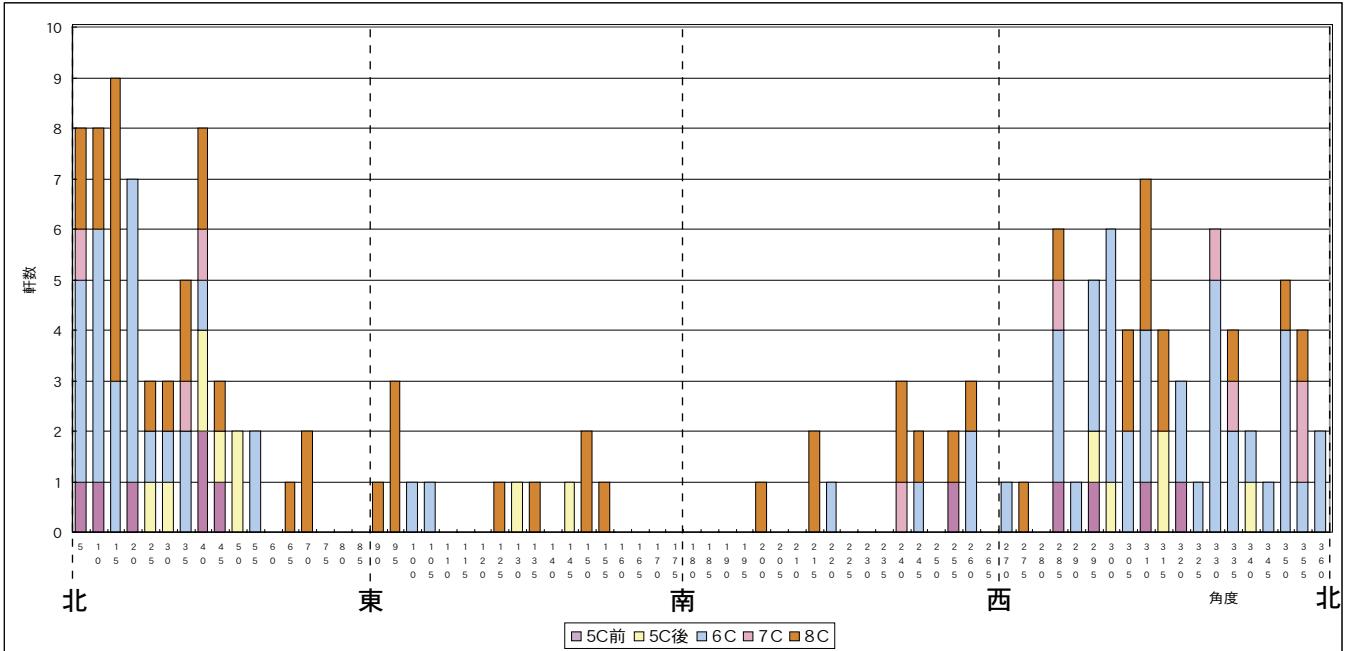
さて、市内の遺跡を時期別にならべたものが第80図のグラフである。このグラフから
 ①カマド導入前の5C前と導入後の5C後以後では方位角に大きな差が見られない。
 ②全体的には270度（西）～90度（東）の間に集中しており、幾つかのピークが数ヶ所見られるもの、



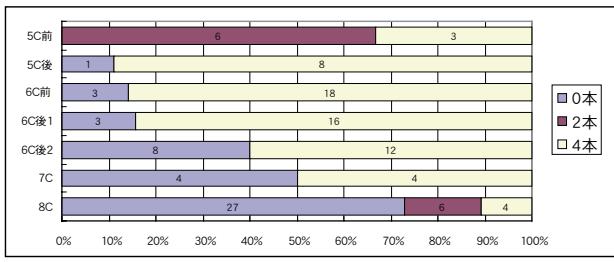
第78図 方位角模式図



第79図 竪穴住居類例 (1/150)



第80図 主軸方位時期別度数分布図



第81図 主柱穴配置時期別推移

第6表 主柱別竪穴規模推移表

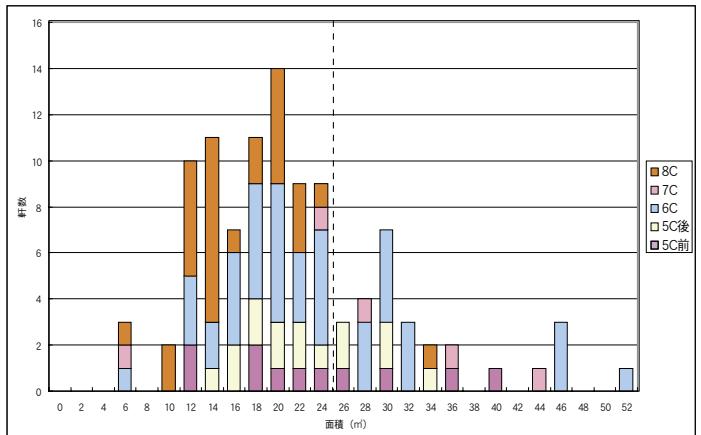
時期	0本柱			2本柱			4本柱		
	面積	件数	標準偏差	面積	件数	標準偏差	面積	件数	標準偏差
5C前	0	0	0	18.9	6	4.93	34.1	3	4.44
5C後	14.8	1	0	0	0	0	21.9	6	4.13
6C前	15.4	2	3.03	0	0	0	23.7	11	9.28
6C後①	15.1	2	0.56	23	1	0	24.8	14	11.68
6C後②	23.4	1	0	0	0	0	25.9	9	8.71
7C	4.8	1	0	0	0	0	31.3	2	4.87
8C	13.3	12	4.37	18	5	5.79	16.2	3	4.34

※標準偏差は数値が大きい程個体間のバラツキが大きい。

中には90~270度の所謂南向きカマドも見られるなど、一定の傾向を抽出するのは困難である。

といった2つの傾向が見られる。これらをまとめると、①の点からカマドの設置によって主軸方向に変化は生じておらず、住居の空間配置の基本原則は大きく変わってはいない。②より西~東の間がカマドの設置において好まれたと言えるのみで、時期別及び日田地域において特定方向への設置が規制されていたわけではないと指摘出来よう。

したがって、カマドの採用にあたっては、弥生時代以来の伝統的な住居空間配置の中に新規の施設が組み込まれたものと思われ、笠森氏も指摘する全国的な動向と同一のものと言える。これは、第79図に示すうきは市塚堂遺跡D地区9号住居のように、方形張り出しやベッド状遺構という従来の屋内施設を有するものが見られる点からも肯定されよう。そして、これら弥生的な屋内施設は次第になくなり、南壁に設置されていた屋内土坑もカマド導入直後には、本遺跡24号住居のようにカマド脇へと場所を変えることになることからも、カマドの設置により住居空間を次第に変更することになったものと推測される。また、特定方向への規制の緩さは、本遺跡



第82図 竪穴規模時期別度数分布図

※面積計算は単純に長軸×短軸で計測しており、正確な値とは異なっている点をお断りしておく。

11号住居のように住居拡張に伴いカマドも横にずらして再構築するものもあれば、第79図に示す求来里平島遺跡II 2号住居のように北側に設置されていたカマドが南側に作りかえられている例もあることなどからも肯定されうるものであろう。また隅カマドが導入期以後一定量認められることもその一例であろう。しかし、本調査区のように同一遺跡において軸をほぼ揃えるケースなども見られ、小地域内での趣向性があった可能性も完全に否定は出来るものではない。いずれにしてもさらに推し進めて議論するためには、屋内空間の利用意識や入口部との関係を論じる必要があるが、ここでは扱うだけの資料を有さないので今後の課題としておきたい。

主柱配置と規模

次に住居構造の変化を検討するため、主柱穴の配置と竪穴規模との関係を検討する。第81図のグラフは時期別の主柱配置の変化を示したものである。このグラフから、

- ① 5C前半と後半で2本と4本主柱が並存していたものが、カマド導入以後4本主柱が大半を占めるようになる。
- ② カマド導入以後ほぼ4本柱に統一された主柱配置は次第に無柱穴が増加し、TK43期には4割程度が無柱穴化し、8世紀にかけてほぼ無柱穴化する。

という2つの傾向が読み取れ、弥生時代以来の伝統的な住居の上屋構造がカマド導入によって大きく変化した可能性が高く、6世紀後半にはさらなる変化が生じた可能性がある。次にこの主柱穴の変化が竪穴規模とどのように関わっているのかを検討したのが第6表である。軒数の少ない時期もあるため動向が明確ではないものの、竪穴部平均面積・軒数・標準偏差を示している。この表から、

- ③ 5C前半段階では2本主柱で平均約19m²、4本主柱で平均34m²と竪穴規模の大小によって主柱数が異なっている。^{註29}
- ④ 5C後以降の主柱配置では2本主柱が殆ど見られなくなり、5C後以降の4本主柱で20m²台、無柱穴では10m²台を示す。
- ⑤ 6世紀代において大半を占める4本主柱の面積の標準偏差の値が10前後と非常に大きく、同じ主柱配置でも規模にバラツキがある。これは4本主柱においても規模の大小が存在していることを示しており、6世紀においては規模と主柱配置が連動していない。

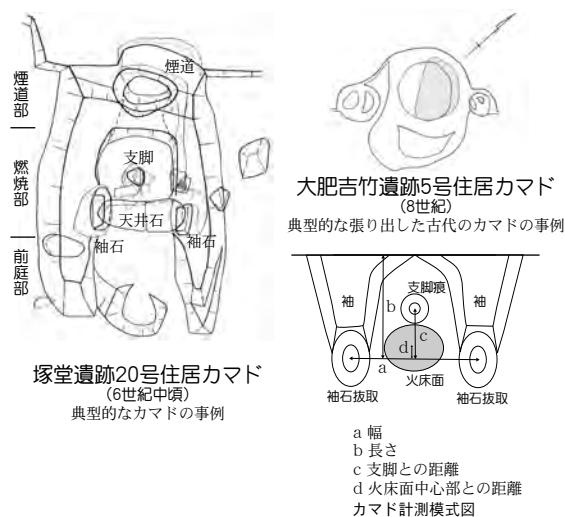
という3つの傾向が読み取れるのである。次に竪穴規模の時期別推移を示したのが第82図である。この図からは、

- ⑥ 8世紀を除く全ての時期を通じて25m²を境に規模を大きく2分出来る。

- ⑦ 8世紀では25m²以下に規模が集中する。

という2つの傾向が読み取れる。これら①～⑦の傾向をまとめると、①からカマドの導入によって4本主柱に集約されることで上屋構造に大きな変革が生じている可能性が高く、②⑦の点から無柱穴化や竪穴規模の小形化などさらに変化する可能性が高い。この点は第79図に示す尾漕遺跡10・11号住居において4本主柱と無柱穴化した住居がほぼ同時期の6世紀後半に確認されていることから、この変化は漸移的に発生したものと考えられる。また、⑥から各時期を通じて基本的に大小の規模の住居が存在した可能性が想定され、この規模の違いによって③④⑤のように2本・4本・無柱穴という主柱配置に違いが生じており、6世紀代において4本主柱の構造を変えることなく規模を違える住居が見られるのである。

このような動向は、カマドという排煙装置を有する施設を構造的に組み入れる必要性から上屋構造が変化した可能性を示唆しており、さらに導入後も6

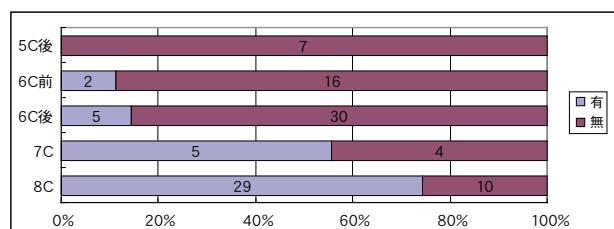


第83図 カマド類例（1/60）と計測模式図

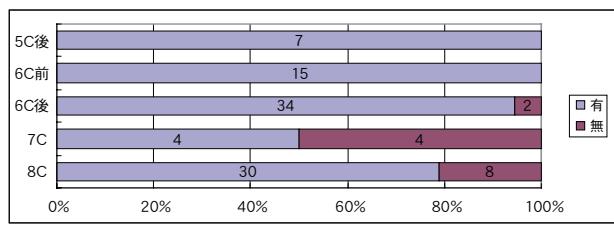
世紀後半から上屋構造を変化する必要性が生じたものと思われる。この点については後のカマド構造の検討で述べるが、いずれにしてもカマドの導入による影響は大きかったものと言えよう。しかし、竪穴規模については少なくとも8世紀に至るまでは主柱配置を違えながらも大小規模が存在し、8Cに至ると小規模のみに集約される傾向があり、この規模の違いについては細かな集落内配置などの検討が必要であり、今後の課題としたい。

カマドの構造変遷について

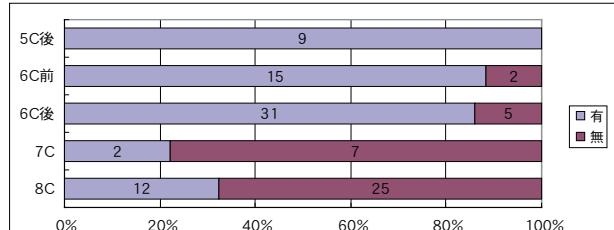
次に、このように住居構造に大きな影響を与えたと想定されるカマドの時期的変化について検討してみたい。カマドの構造を理解する上で市内には明瞭な類例がないため、第83図に示すうきは市塚堂遺跡D区20号住居をもっとも典型的な例として挙げてみよう。これを見ると、前庭部まで粘土で被覆し、焚き口内側には袖石・天井石を埋め込み、甕を掛けるための支脚に石材を用い、煙道は竪穴部手前からやや外に向かって一体的に作られる。このような構造は日田地域においても共通していたと思われ、袖石・支脚に石材を利用するカマドが大半を占めていることからも肯定されよう。これは、古代の住居においても第83図に示す大肥吉竹遺跡5号住居のように袖石の存在が認められており、継続的に利用されていたことを示している。しかし、カマドそのものが祭祀行為などによって破壊を受けているケースが非常に多く、前庭部範囲や袖の被覆状況などの全容をつかめる類例は非常に少ないと言わざるを得ない。そのため規模の検討などを困難にしているのである。そこで、前述のような構造の特徴の中でも日田地域で大半のカマドに袖石・支脚石が利用され、破壊が著しいものでも袖石の抜取り痕が認められることに着目し、第83図の計測模式図に示すように、燃焼部の幅と長さ及び袖石間から支脚・火床面中心部までの距離を計測することで、カマドの主たる機能を担う燃焼部や掛け口などの位置が変化していないかを検討することにした。ただし、この検討からは前庭部を対象として除外しており、残存状況の悪さから燃焼部と煙道部の区分が明確でないものが殆どであるため、煙道が竪穴外に明瞭に長く張り出しているもの以外は燃焼



第84図 カマド張出の推移



第85図 袖石利用の推移



第86図 支脚石利用の推移

第7表 カマド計測値平均推移

時期	件数	a 幅	b 長さ	c 軒数	d 袖石・支脚間	d 火床面
5C後	7	62.57	74.57	7	24	0
6C前	15	67.67	64.67	15	29.67	3
6C後	30	73.17	59.00	23	26.52	0.43
7C	4	70.00	53.75	1	25	5
8C	25	63.00	51.96	10	21.5	4.4
全体	81	67.28	60.79	56	25.34	2.58

※単位はcm

第8表 煙道時期別推移

時期	有	無	総数	平均
5C後	1	6	7	5
6C前	5	10	15	60
6C後	10	27	37	50.7
7C	1	7	8	20
8C	3	31	34	21.7

※単位はcm

第9表 袖石利用石材軒数推移

時期	凝灰岩	河原石
5C後	3	2
6C前	4	3
6C後	9	5
7C	1	1
8C	2	6

※凝灰岩は加工されている事が多い
ため、凝灰岩と川原石の2者に区分して検討している。

第10表 支脚利用石材軒数推移

時期	凝灰岩	河原石	土器(高坏)
5C後	2	2	2
6C前	4	3	1
6C後	9	3	0
7C	0	1	0
8C	0	1	0

部の長さとして計測している点を断つておく。

さて、この規模の変化を示したのが第7表である。この表から、

- ① a幅・c袖石と支脚間距離・d火床面距離は時期的に変化が殆ど見られない。
- ② bの長さが時期が新しくなるほど短くなる。

という2つの傾向が読み取れる。このうち①から、カマドの導入以降、幅や掛け口・焚き口の構造は基本的に変わっていないことが判る。つまり、火床面の間のもっとも熱を受ける箇所には必ず袖石や天井石が設置されることで、カマド燃焼部壁体の破損を防ぐとともに燃焼効率を高める方法が古代までの間踏襲されていった可能性が高いと思われる。そして、もっとも床が被熱した面より20cm程奥壁側に支脚を設置し、煙道への空気対流によって高温の炎を受ける事の出来たこの位置（支脚位置）が掛け口として利用されていたものと想定されるのである。この構築の基本原理は古代に至るまで殆ど変わることなく、支脚が1個しか見られないことからも、カマド掛け口は杉井氏^{註30}が西日本の一般的な傾向として挙げる1つ掛けであると思われる。田中氏^{註31}は古代の事例から、火床面直上と支脚上の縦並び2つ掛けを想定しているが、袖石や支脚・火床面の位置関係が古代までの間殆ど変わらないという今回の分析結果から、1つ掛けと捉えておきたい。また、②のカマドの長さが6世紀前半から次第に縮小化する傾向は、煙道部が竪穴内部のカマド壁体と一体的に構築されていたものから分離し、竪穴外の地山を掘り込んで作られるようになった結果を反映していると考えられる。前者は第83図の塚堂遺跡D区20号住居がその好例であり、後者は本遺跡12号住居が好例である。また、第79図尾漕遺跡10号住居のように、煙道と共にカマドそのものが竪穴外部に張り出すようになる例が見られる。そこでカマドの張り出しの時期的な変化を示したのが第84図である。これから、6世紀に若干数張り出しが見られるようになり、7世紀から8世紀にかけて殆どのカマドが張り出すようになる傾向が見られる。これは前述のカマドの長さが次第に縮小化して煙道が竪穴外に作られるようになる動向と時期的には連動している。カマドや住居の構築にとって重要な要素の一つが排煙装置であり、そのほかの基本構造に変化が生じていないことから考えると、カマドが竪穴内作り付けから竪穴外に次第に張り出すようになるのは、カマドの構造変化ではなく煙道の構築方法の変化に起因する可能性が高いと言える。

さて、前述のようにカマドの張り出しと煙道の構築方法が関係するものと想定したが、煙道そのものは実際には検出例が非常に少ない。第8表は煙道のデータであるが、煙道部は竪穴部の残存状況が悪いほど残りが悪いため、全体的に例が少ない。この少ないデータで確実な動向を推察するのは難しいものの、6世紀代では煙道部の長さが5~60cm平均であるのに対し、7・8世紀代では20cm平均と縮小化する傾向が見られる。これは小田氏が竪穴部の縮小化と煙道の長大化が連動することを理由に居住占有空間面積そのものに変化はない指摘する動向とは異なっており、一概に、竪穴部の縮小化と煙道規模の長大化が連動するとは限らない可能性を指摘出来る。この点は筑後川中流域の例ではあるが大庭氏^{註32}も同様の指摘をしている。

次に、前述の変化に伴いカマドに使用される材に変化がないか検討を行った。第85図は袖石の利用状況を時期別に示したものである。7・8世紀にかけて次第に袖石を利用しないカマドが若干増加するものの、大半が袖石を利用していることを示している。また、第9表に示すように、袖石に利用される石材は、加工した凝灰岩と未加工の河原石のどちらへの嗜好性は見出しつく、近隣で入手可能な石材が利用された可能性が高いと思われる。（報告書によつては利用石材についての記載がないため極端に軒数が少なくなっている。）これに対し、支脚痕跡等の有無を時期別に示したのが第86図である。これから7・8世紀にかけて支脚の利用痕跡が殆ど見られなくなる傾向が読み取れる。また、第10表に支脚材の内訳を示しているが、6世紀後半に凝灰岩が好まれた可能性があるものの明瞭な傾向は見られず、土器を転用する支脚は6世紀前半までには見られなくなる。大庭氏^{註33}は堂畠遺跡の事例を基に、8世紀に至ると支脚痕跡が確認されなくなり、堂畠遺跡3次第110・111号住居の土

器固定用粘土の痕跡などから、石製支脚から土器支脚へと変化した可能性を指摘している。日田地域では支脚に用いられた粘土塊などの存在は見られず不明な点が多いものの、8世紀においても石製支脚痕跡が見られる類例があることやこれまでの分析などから、カマドの基本構造はほとんど変わっていないものと推測される。とすれば、カマドの基本構造の変化によって支脚石や痕跡が見られなくなるのではなく、甕を支える方法が変化した可能性を考えておきたい。それは、大庭氏の言うような材の変化も考えられるが、移動式カマドのように甕を挿入するために円形状に構築されたであろう掛け口そのもので甕を支えていた可能性がある。土器などの支脚材の痕跡が殆ど検出されないことからも、この可能性は強いものと思われるが、類例が少なく今後の検討課題としたい。

カマド祭祀について

今回はカマド祭祀行為についての検討は行っていない。日常容器や祭器などがカマド内に破棄され、明瞭に祭祀の痕跡が確認されればカマド祭祀と位置づけることも出来るが、土層の観察などから破壊を受けている可能性が高いものを祭祀と位置づけるか検討の余地があると考えるからである。この破壊には本遺跡7号住居のように天井石を手前に引き倒しているものもあれば、袖石や支脚などを完全に除去してしまうものや石材は残存したまま壁体を破壊するものなど多様な形態を呈していると思われる。また、他地域の事例では破壊後に粘土を被覆する行為などが見られるものの、市内では明瞭な痕跡は見られない。このように多様な破壊行為が、単に廃棄行為に伴うものであるのか、それとも祭祀に伴うものであるのか特に現場での詳細な観察と類型化が必要となってくると思われるのである。カマドの定着によって竈神が宿ると考えられるようになり、カマドが神聖化されるようになると共にカマド祭祀が一般化するようになるとの指摘^{註34}などには異論はないが、まずは祭祀の形態そのものを考える必要があろう。この点は今後の分析課題としたい。

おわりに

さて、以上のように住居の変遷とカマドの構造について検討してきた結果をまとめると、

1. カマド導入期には、弥生的な従来の住居構造の中に炉に変わる屋内施設としてカマドが取り入れられた可能性が高いが、特定壁を占有し排煙施設を設置するという物理的な問題から、上屋構造や空間配置を変更する事を余儀なくされたため、屋内土坑の位置が変化し、主柱配置が4本柱へと収斂した可能性が考えられる。
2. カマド設置方向に関しては強い規制が働いていたわけではなく、主軸に関する考え方は従来の考え方をある程度踏襲していく可能性がある。また、8世紀を除いて竪穴部規模に大小の違いが見られるようであり、これは前時代から引き継がれたものであると推測される。
3. 6世紀以降になると顕在化する主柱配置の変化、カマドの張り出しの増加やカマドと一体化していき煙道部の分離、竪穴部の小規模への集約などの変化傾向は、ある程度連動していた可能性が高いと思われる。しかし、それぞれの変化は6世紀から7世紀にかけて次第に生じてあり、同時に全ての変化が生じているわけでもないようである。これは、ある要因のもとに次第にカマド構築や住居構造方法に変化を及ぼさざるを得なくなつたためと思われ、その主要因として排煙の問題を考えたい。カマドにおける燃焼部と煙道部の分離が少なくとも6世紀前半から始まっていた可能性があるのに対し、主柱穴配置の変化がやや遅れた6世紀後半から生じていることからも、排煙施設の変化が住居構造変化の要因となつた可能性を肯定するものと考えられよう。つまり、排煙方法の変化によりカマドの位置が変化し、排煙や空間配置などに関連する上屋構造構築要素となる竪穴規模や主柱配置なども次第に変更する必要性が生じ、試行錯誤を繰り返しながら7世紀から8世紀において新たな住居構造やカマド構造が統一的に採用されるようになったものと推測しておきたい。
4. 全時期を通じてカマドに使用される石材などに変化は見られないが、支脚が7～8世紀代には殆ど利用されなくなる傾向が見られ、これは掛け口における甕を支える方法が変化した可能性が考えられる。

以上のような大まかな動向を今回の分析から読み取ることが出来た。しかし、あくまで日田地域のみでの傾向であるためこれらの動向が他地域と同一かどうかは今後の検討が必要であると感じている。また、明らかとなっ

た動向でもその原因が何によるのか今回の分析では明らかに出来なかったものや今後の課題としたものも多く、分析や対象資料に抜けなどもあることは否めない。これらについては住居空間の利用方法などの検討を推し進めて議論する必要があり、さらに検討を深めていきたいと思う。

最後に、今回の検討を行うにあたって、同僚の若杉竜太氏・比嘉えりか氏には様々なご協力とご教授をいただいた。記して感謝申し上げたい。

- 註1 重藤輝行 「仁右衛門畠遺跡を中心とした浮羽郡の古墳時代土師器編年」 吉田東明編『仁右衛門畠遺跡』 I 浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告第12集 2000
「福岡県における古墳時代中期～後期の土師器」『古墳時代中・後期の土師器-その編年と地域性-』 第5回九州前方後円墳研究会発表要旨資料 2002
「筑後川流域における古墳時代集落の展開-特に浮羽地域を事例として-」 平成19年度九州考古学会総会研究発表要旨・資料集 2007
※重藤編年に関しては2000年のものと2002年のもので区分単位及び須恵器との並行関係に若干の違いが生じているが、2007年資料において2002年論文を踏襲する形で解消しており、氏の編年観に関しては今後これを使用するものとする。
- 註2 田崎博之 「Ⅲ干潟遺跡出土土器の編年-特に土師器を中心として-」『干潟遺跡I』福岡県文化財調査報告書第59集 福岡県教育委員会
- 註3 田辯昭三 「須恵器大成」角川書店 1981
『陶邑古窯址群I』平安学園考古学クラブ 1966
- 註4 山本信夫 「北部九州の7～9世紀中頃の土器」『古代の土器研究-律令的土器様式の西東-』古代の土器研究会第1回シンポジウム資料集 1992
- 註5 家根祥多 「土器の交流（晩期を中心に）」『本州西部地域における文化交流の諸問題』第9回中四国縄文研究会発表資料 1998
- 註6 調査指導にお越しいただいた際に実見頂き御教授いただいた。
- 註7 橋口達也 『池の上墳墓群』甘木市文化財調査報告第5集 1979
- 註8 小田富士雄 「九州の須恵器」『世界陶磁全集2・日本古代』 1979
「須恵器の源流-九州地方-」『日本陶磁の源流-須恵器出現の謎を探る-』柏書房 1984
「須恵器文化の形成と日韓交渉・解説編-西日本初期須恵器の成立をめぐって-」『古文化談叢』第24集
- 註9 中村浩 『和泉陶邑窯の研究-須恵器生産の基礎的考察-』柏書房 1981
- 註10 今田秀樹 「2.町ノ坪遺跡D区」『平成17年度（2005年度）日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会 2007
- 註11 今田秀樹 「4.名里遺跡」『平成19年度（2007年度）日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会 2007
- 註12 土居和幸 『求来里平島遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第38集 日田市教育委員会 2002
- 註13 行時桂子 『求来里平島遺跡II』日田市埋蔵文化財調査報告書第77集 日田市教育委員会 2007
若杉竜太 「3.求来里平島遺跡E・F区」『平成17年度（2005年度）日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会 2007
原田昭一 「求来里平島遺跡D区」『一級河川求来里川河川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書第31集 大分県教育庁埋蔵文化財センター 2008
- 註14 土居和幸 「7.町ノ坪遺跡A～C区」『平成15年度（2003年度）日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会 2004
- 註15 松本康弘・田中裕介 「金田遺跡1・3次調査区」『一級河川求来里川河川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書第31集 大分県教育庁埋蔵文化財センター
若杉竜太 「4.金田遺跡」『平成16年度（2004年度）日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会 2005
- 註16 若杉竜太 「5.小西遺跡・町ノ坪遺跡D区」『平成16年度（2004年度）日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会 2005
- 註17 田中裕介 「手崎遺跡」『日田市高瀬遺跡群の調査2』一般国道210号日田バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書II 大分県教育委員会1998
- 註18 「陣ヶ原辻原遺跡」『日田市高瀬遺跡群の調査』一般国道210号日田バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書I 大分県教育委員会1995
- 註19 行時桂子編 『石ヶ迫遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第49集 日田市教育委員会 2004
- 註20 吉田博嗣 『口が原遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第17集 日田市教育委員会 1998
- 註21 渡邊隆行編 『一丁田遺跡II』日田市埋蔵文化財調査報告書第83集 日田市教育委員会 2008
- 註22 馬田弘穂編 『塙堂遺跡I』一般国道210号線浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告第1集 福岡県教育委員会 1983
副島邦弘編 『塙堂遺跡II A地区』一般国道210号線浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告第1集 福岡県教育委員会 1984
馬田弘穂 『塙堂遺跡IV D地区』一般国道210号線浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告第4集 福岡県教育委員会 1985
- 註23 重藤輝行 「仁右衛門畠遺跡を中心とした浮羽郡の古墳時代土師器編年」 吉田東明編『仁右衛門畠遺跡』 I 浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告第12集 2000

- 註24 若杉竜太『求来里の遺跡Ⅱ 金田遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第89集 日田市教育委員会 2009
- 註25 行時志郎編『荻鶴遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第9集 日田市教育委員会 1995
- 註26 小田和利「北部九州のカマドについて」『文化財学論集』文化財学論集刊行会 1994
- 註27 大庭孝夫「堂畠遺跡におけるカマドの在り方について」『堂畠遺跡Ⅲ』一般国道210号線浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告第23集 福岡県教育委員会 2005
- 註28 笹森建一「豎穴住居の使い方」『古墳時代の研究2 集落と豪族居間』雄山閣出版株式会社 1990
- 註29 この点は同僚の比嘉えりか氏とのディスカッションから知見を得て分析を行った。そのなかで弥生後期～古墳時代前期の方形住居において2本主柱と4本主柱の2種類が見られ、その違いは規模による可能性が高いとご教授いただいた。
- 註30 杉井健「竈の地域性とその背景」『考古学研究』第40巻第1号 考古学研究会 1993
- 註31 田中裕介「調査の成果と課題 第2節奈良時代 2-1 以降各説②豎穴建物跡」『日田市高瀬遺跡群の調査 上野第1遺跡』一般国道210号日田バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ 大分県教育委員会 2001
- 註32 註27と同じ
- 註33 註27と同じ
- 註34 佐々木隆彦「IV総括にかえて 1 竈祭祀考—北部九州を中心として—」『松木遺跡I (下巻)』那珂川町文化財調査報告書第11集 那珂川町教育委員会 1984

《報告書》

- 『石ヶ迫遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第49集 日田市教育委員会 2004
- 『一丁田遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第68集 日田市教育委員会 2006
- 『一丁田遺跡Ⅱ』日田市埋蔵文化財調査報告書第83集 日田市教育委員会 2008
- 『上野第1遺跡』『日田市高瀬遺跡群の調査3』一般国道210号日田バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ
大分県教育委員会2001
- 『内ノ下遺跡・大行事遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第33集 日田市教育委員会 2002
- 『尾漕遺跡 (第2次調査区・第5次調査区)』大分県文化財調査報告書第112輯 日田市教育委員会 2000
- 『尾漕遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第30集 日田市教育委員会 2007
- 『大肥遺跡II-B・C区の調査の記録-』日田市埋蔵文化財調査報告書第66集 日田市教育委員会 2006
- 『大肥中村遺跡I』日田市埋蔵文化財調査報告書第62集 日田市教育委員会 2006
- 『大肥吉竹遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第48集 日田市教育委員会 2004
- 『金田遺跡1・3次調査区』『一級河川求来里川河川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』
大分県教育庁埋蔵文化財センター報告書第31集 大分県教育庁埋蔵文化財センター 2008
- 『求来里平島遺跡II』日田市埋蔵文化財調査報告書第77集 日田市教育委員会 2007
- 『求来里平島遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第38集 日田市教育委員会 2002
- 『平島遺跡D地点・塔ノ本古墳・祇園原遺跡2次・長迫遺跡C地点・長迫遺跡D地点・尾漕遺跡6次』日田市埋蔵文化財調査報告書第28集
日田市教育委員会 2001
- 『葛原遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第39集 日田市教育委員会 2002
- 『葛原遺跡II』日田市埋蔵文化財調査報告書第53集 日田市教育委員会 2004
- 『口が原遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第17集 日田市教育委員会 1998
- 『郷四郎遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第82集 日田市教育委員会 2007
- 『佐寺原遺跡・尾漕遺跡群・有田塚ヶ原古墳群』九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書(9) 大分県教育委員会 1998
- 『陣ヶ原辻原遺跡』『日田市高瀬遺跡群の調査』一般国道210号日田バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 I
大分県教育委員会1995
- 『惣田遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第8集 日田市教育委員会 1994
- 『長者原田迎遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第5集 日田市教育委員会 1992
- 『長者原遺跡』『日田地区遺跡群発掘調査概報II』日田市教育委員会 1987
- 『手崎遺跡』『日田市高瀬遺跡群の調査2』一般国道210号日田バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書II 大分県教育委員会1998
- 『西有田赤ハゲ遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第7集 日田市教育委員会 1992
- 『日田条里上手地区III・高瀬条里永平寺地区・尾部田遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第34集 日田市教育委員会 2001
- 『本村遺跡3次』日田市埋蔵文化財調査報告書第51集 日田市教育委員会 2004
- 『山口遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第20集 日田市教育委員会 2000